

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第33号

2017年7月8日

マタイ受難曲 各論-5 (第10,11,12,13,14,15,16曲)

第10曲 コラール「それは私、私こそ償うべき者」(4声合唱、変イ長調)

パウル・ゲアハルト作詞のコラール「ここでおまえの命が」の第五節。原曲はハインリヒ・イザーク作曲「インスブルックよさようなら」です。第9曲で「この中に私を裏切る者がいる」というイエスの言葉に対して口々に「それは私ですか?」と問いかける弟子たち(ユダを除く11人)の声に「それは私なのです」と答えるのはユダではなく、信者たちなのです。「私たちこそ地獄の苦しみを受けるにふさわしいのです」と、自らの罪を告白するコラールです。キリスト教徒にとって「罪」とは世俗的な犯罪だけではなく、キリストの愛を受け入れず原罪を負ったままで生きることに他なりません。たとえ信仰を告白し洗礼によってその罪を許された者といえども、それだけでは罪から完全に解放されたとはいえないのです。悪魔は心の隙をついて弱い人間の耳元にささやきかけ、人は時にその誘惑に屈してしまいます。己の罪に悩むその人たちのためにカトリック教会には「告解」(現在は「ゆるしの秘蹟」と呼ばれ、正教会では「痛悔機密」、聖公会では「個人懺悔」と呼ぶ)という信仰儀礼があります。プロテスタント教会では儀礼として定められてはいませんが、会衆や牧師の前で信者が「罪の告白」をすることがあります。

このコラールはいわば信者による「罪の告白」と言うべきものですが、歌詞の内容(地獄、鞭、枷など)に比べて曲想は決して苦くも痛切でもなく、むしろ伸びやかでおおらかな気分を感じます。これを「潔さ、爽やかさ」とするのが磯山雅の見解ですが、果たしていかがなものでしょうか。ここで言う罪の告白はすなわち信仰の告白でもあり、厳粛かつ切迫した宣言であると思いますが、それにしてはこのコラール、いささかのんびりしすぎているように思いませんか。あるいはこれが当時の教会の空気だったのでしょうか。

第11曲 レチタティーヴォ・アリオーソ:最後の晩餐(エヴァンゲリスト、イエス、ユダ)

緊張の場面は続きます。イエスが「人の子を裏切る者に災いあれ、そのものは生まれてこなかった方がよかったのだ」と言い放つと、たまりかねたユダがついに口を開きます。「先生、それは私のことですか?」イエスはきっぱりと「おまえが言ったとおりだ」と告げるのです。息をのむ場面ですね。イエスのはちにも同じように質問に直答せず、相手の言葉を間接的に繰り返す話法を使います(第43曲、ピラト「おまえがユダヤの王なのか?」イエス「あなたがそう言っている」)。

ここで場面は最後の晩餐の核心へと進みます。ここでイエスが行うパン(体)と葡萄酒(血)の儀式はその後2000年以上、キリスト教会のミサ聖祭(プロテスタントでは主日礼拝)の中核をなす聖体拝領(聖餐式、あるいは聖晩餐)として受け継がれています。

「皆この杯から飲みなさい」から「父の国で」まではアリオーソになってイエスの言葉が旋律的に歌われ、バッハが聖餐の場面を特別扱いにしたことが判ります(淡野弓子「バッハの秘密」から自由に引用)。

第12曲 レチタティーヴォ・アコンパニヤート「ああ、私の心は涙の中を漂う」(ソプラノ、オーボエ・ダモーレ 1, 2、通奏低音)

3度の平行音程の3連符でたゆたう2本のオーボエ・ダモーレ(「愛のオーボエ」の意味、通常のオーボエ(C)より短3度低いA(ラ)を基音とする楽器で、先端の丸い朝顔の形により柔らかな音がする)に乗ってソプ

ラノが歌うレチタティーヴォで、オーボエの音型は歌詞にある「涙(の海)」の音画です。弟子たちに発せられたイエスの別れの言葉を、涙なしに聴くことが出来ない信者の心が描かれます。

最終行の歌詞では「liebt 愛する」に高い G(ソ)、「Ende 最後」に低い C(ド)が与えられ、1オクターブ半の下降音程が作られています。イエスの愛があまねく天地に広がるさまを表しているかのようです。

第13曲 アリア「私はあなたに心を捧げます」(ソプラノ、オーボエ・ダモーレ1、2、通奏低音)6/8拍子、ト長調

2本のオーボエ・ダモーレによる同度のカノンで前奏が始まり、ソプラノが順次進行の旋律を、シンコペーションを効かせた軽いリズムに乗せて歌い出します。喜ばしくしかも毅然とした音楽が、イエスへの愛を誓う信者の高揚した気持ちを余すところなく表現しています。オーボエ・ダモーレのモチーフは、ソプラノの旋律に修飾を加えたものと解釈できます。

このアリアを以て、第9曲に始まる「最後の晩餐」の場面が締めくくられます。

第14曲 レチタティーヴォ:オリーブ山にて(エヴァンゲリスト、イエス)

イエスと弟子たちはオリーブ山に上り、イエスは弟子たちに彼らの「つまずき」と自らの復活を預言します。預言とは神の言葉が預言者の口を通して語られることです。ここでイエスは旧約(ゼカリヤ書)の預言を引用します。ゼカリヤとは旧約時代の預言者の名前です。神の子イエス(キリスト、すなわち救世主:メシア)の降誕、受難、復活のすべては旧約(神と人との古い契約)の預言が成就することである、としてその正統性を主張するのがキリスト教であり、それを認めず今も救世主の出現を待ち望むユダヤ教や、ムハンマドを最後の預言者と仰ぐイスラム教と、決定的に対立する所以です。

第15曲 コラール「私を認めてください、守り主よ」(4声合唱、ホ長調)

マタイ受難曲中で合計5回、その都度調性を変えて使われる有名な受難コラールがここで始めて登場します。コラールの作詞は第10曲と同じ P. ゲアハルト、作曲はヨハン・クリューガー(原詩は17世紀イタリアの聖歌、原曲はハンス・レオ・ハスラー「我が心は千々に乱れ」)で、ここではその第5節が歌われます。

この曲は短調の第3音で終わっているため、フリギア調(ミから始まる教会旋法)としての、また長調としての編曲も可能です。長調による編曲として有名なのが同じバッハの書いた「クリスマス・オラトリオ」の終曲であることは以前にも書きました。バッハはクリスマス・オラトリオの最後に、トランペットとティンパニが加わった輝かしく壮麗な編曲でこの曲を扱うことによって、爆発的な喜ばしさの中にも来たるべきイエスの受難を予言しているのだ、とする説があります。

余談ですが、アメリカの二人組、サイモンとガーファンクルに「American Tune」という曲があります。メロディーはこのコラールと全く同じですが、歌詞はポール・サイモンのオリジナルで、1973年のアルバム「ひとりごと」に収録され、1981年の「セントラルパーク・コンサート」でもギター一本の伴奏で歌われました。

第16曲 レチタティーヴォ(エヴァンゲリスト、イエス、ペトロ)

「皆、私につまずくであろう」というイエスに対し、弟子の一人であるペトロが誓います。「たとえ皆があなたにつまずいても、私はつまずきません」。しかしイエスは「今夜、鶏が鳴く前に、おまえは私を三度知らないと言うだろう」とペトロに告げます。ペトロは再び「ご一緒に死ぬようなことになっても、知らないとは申しません」と、持ち前の熱血漢ぶりを発揮します。後にこの誓いを自ら破ろうなどとは夢にも思わずに。(次号に続く)

【後記】「マタイ」公演の準備が進んでいます。楽事としては舞台の設営、ソリストの配役、オーケストラの香盤(各楽器の出番)などで事務局長に協力しています。大曲であるがゆえに、他にも多くの課題が山積しています。(新井)